

(3) たがいに信頼し、学び合っ

学び合い、高め合える友情を

友達は、遊ぶ仲間だと思っていたけれど
 落ちこむ私を君がはげましてくれたとき
 胸がぐっと熱くなった。
 そうなんだ、これが友達なんだって
 あのとき初めて気が付いた。
 はなれていたって
 きっと私のことを考えてくれている。
 そう思うからこそ
 たがいにはげまし合って生きていける。



だけど……こうきばかりじゃないうね

●あなたにとって友達とは。

友情は成長のおそい植物である。
 それが友情という名の花をさかす前に、
 幾度かの困難な打撃に
 たえなければならぬ。

ジョージ・ワシントン
 (初代アメリカ合衆国大統領)

友人に不信をいだくことは、
 友人にあざむかれることよりも
 もっと恥ずべきことだ。

ラ・ロシュフコー
 (フランスの文学者)

6年

5年

男女仲良く協力し助け合って

私は、男子がいて良かったなあ、と思うことが三つあります。
 一つ目は、あいさつのことです。男子はほとんどの人が先生や友達にあいさつをします。私はなかなか大きな声を出せなかったのですが、男子と一緒になると、だれかに会うことがあると、普通にだれにでもあいさつができるようになります。

二つ目は、話を聞いてくれることです。テストの結果があまり良くなくて、私が落ちこんでいたとき、仲の良い男子にそのことを話したら、「そんなの、次に頑張ればいいじゃないか」と笑って飛ばしてしまいました。私も、その話を聞いて軽々しく言ってくれたこと、何だか、それもそうだなあ。落ちこんでも仕方がないな。次、頑張ろうと心が探れるようになりました。

三つ目は、女子の友達関係のことです。みんなまで話したときのことです。男子も真面目に考えてくれていて、「女子も男子と仲良く話していいよ」と言ってくれました。私も、男子と仲良く話していいよ、と思っていました。

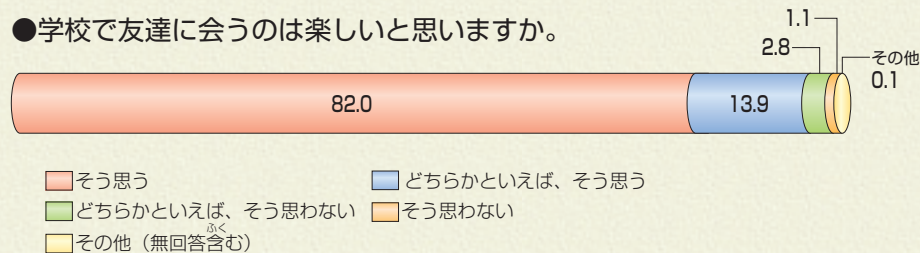
男子と一緒で楽しく学校生活を送りたいと思います。

男子と一緒で楽しく学校生活を送りたいと思います。

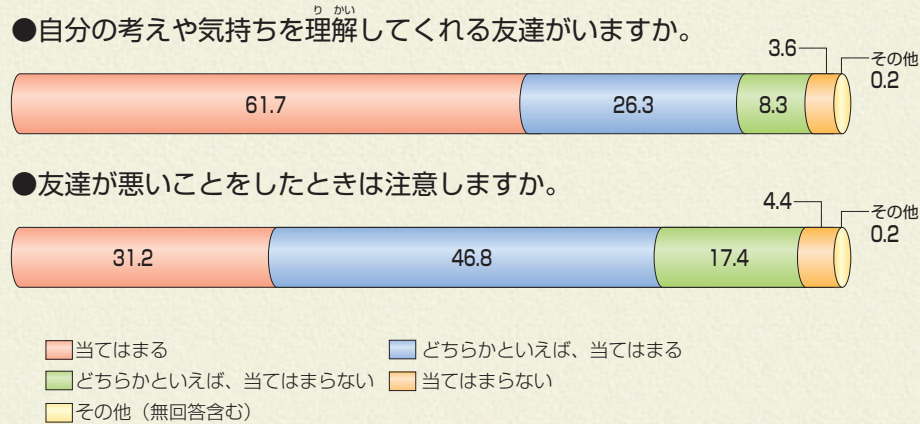
(児童作文)

■ 小学6年生に聞きました。

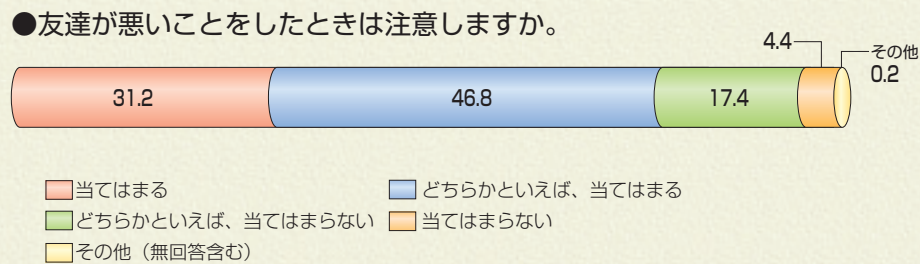
● 学校で友達に会うのは楽しいと思いますか。



● 自分の考えや気持ちを理解してくれる友達がいますか。



● 友達が悪いことをしたときは注意しますか。



文部科学省「平成25年度全国学力・学習状況調査(小学校)」

● 友達との付き合い方について、あなたが大切にしたいことは何ですか。

6年

5年

6年

5年

男女がたがいに意識してしまうのは自然なことです。でも、男子も女子も同じ一人の人間であることに変わりはないのだから、たがいの良さを認めて学び合い、高め合える関係を築いていきましょう。

● 男子と女子の友情について、思ったことや考えたことを書いてみましょう。

あゆみの回想

(九月一日)

いよいよ、新しい学校での生活が始まった。父の転勤とはいえ転校は不安だったが、自己しよ
うかいの後、みんなから拍手をもらい、これから楽しくやっていけそうな気がした。

ちやうど、校門から道路に出ようとするとき、同じクラスのみかさんに声をかけられた。

「ねえ、あゆみさん。私たちなんだか仲良しになれそうな気がするの。その訳は後でゆっくり
話すね。で、早速だけど、これから一緒に遊ばない。時間と場所は後でメールするから、携
帯電話のメールアドレス教えて。」

「こちらこそ、よろしく。でも、ごめんね。私、携帯電話……、持っていないの。その代わり
うちの家の電話番号、教えるから。」

と、言って、メモ用紙に家の電話番号を書いてわたした。

みかさんは、メモ用紙を受け取ると、がっかりした様子で、

「えっ、携帯持っていないの。ううん、じゃあ、またね。」
と、言って、帰ってしまった。

私が前にいた学校では、携帯電話は本当に必要なかつたし、親からもまだ早いだろうと言わ
れていたの、持っていなかったのだ。

(九月二日)

新しい学校での二日目。教室に入ると、みんなの視線が何だか自分に向けられていることに
気付いた。思い切つてとなりの席の男子に聞いてみた。

「ねえ、なんでみんな私の方を見ているんだろう。」

「それはね、たぶん、あゆみさんのことが書かれたメールのことだと思うよ。」

「えっ。何て書いてあったの。」

「今度転校してきたあゆみさんは、前の学校で仲間外れになっていたの、この学校に転校し
てきたんだって。ねえ、それ本当なの。」

私の心は、おどろきでいっぱいになった。

(どうして私がそうなってしまうの。このままだと本当に仲間外れになってしまう。)

私は、どきどきする胸の鼓動を聞きながら、帰りの会で発言した。

「私は、前の学校で仲間外れにされたりしていません。みんなと仲良しでした。

*根も葉もないことをメールで勝手に流されたりして、とても悲しいです。

みんながメールのことを本気にしてしまうといやなので、

勇気を出して言いました。」

帰りのあいさつの後、先生が声をかけて

くれたが、わき目もふらず家に帰った。

「あゆみに電話よ。」という母の声が

聞こえてきたのは夕方四時ごろだった。

根も葉もない
全く理由がない。



(九月一日)

二学期が始まった日、転入生をむかえた。転入したあゆみさんは自己しようかいでこんなことを言っていた。

「私は、漫画が好きで、読むのもかくのも両方好きです。特に、最近は漫画をかくことに夢中です。早くみんなと友達になりたいです。よろしくお願いします。」

私はびっくりした。それは私の趣味と全く同じだったからだ。私も漫画が大好きで、最近はおくほうに夢中だった。

(よし、あゆみさんと友達になって、漫画をかいて遊ぼう。)

まずは、メールアドレスを聞いて、それから遊ぶ時間と場所を決めようと思い、あゆみさんに声をかけた。

私は、再びびっくりした。あゆみさんは、携帯電話を持っていなかった。せっかく、漫画の話ができると思ったのに……。家の電話番号が書かれたメモ用紙は、小さく丸めて、ポケットにつっこんだ。

もしかして、あゆみさんが携帯電話を持っていないということは、友達と連絡できないということ……。ということは、友達があまりいない子だったのではないか、などと思ひ、

《今度の転校生、携帯持ってないんだって。友達あまりいないみたい。これは推測だけど。》と、メールに書いてクラスの友達に送った。

(九月二日)

朝、教室に入るとクラスのみんながあゆみさんのことをうわさしている声が耳に入った。

授業も終わり、帰りの会で、いきなりあゆみさんが手を挙げて言い出した。それは、前の学校の根も葉もないことをメールで流されたということだった。なんで、そんなことがメールで流れたのだろう。

放課後、クラスの友達に聞いてみた。

「さっきのあゆみさんの話だけど、どんなことが書いてあったの。」

「私のメールには、『今度の転校生は、携帯を持ってないから、仲間外れにされて、この学校に入ってきたらしい。』と、書いてあったよ。」

私は、それを聞いて、はっとした。まちがいない。それは、私が書いたメールがいつの間にかこんなことになっていたのだ。私の思いこみがこんなことになってしまうとは……。

頭の中は、あゆみさんのことであっぴいになった。

私が、電話番号の書いてあった紙をきれいにもどし、あゆみさんの家に電話したのは夕方のことだった。



(4) けんきょに、広い心をもちたい

寄りそおうと、分かり合おうとから

私の周りにはたくさんの方がいるけれど、一人として同じ人はいない。感じることも、思うことも、そして考えることもきっとみんなそれぞれ。

だからたがいに認め合い、受け入れ合って生きていくことが大切。

自分とは異なる意見にも耳をかたむけ、なぜそのような立場をとるのかを相手の気持ちに寄りそって考えてみましょう。



どうすればみんなが楽しめるのだろう

私は私と
思っている
自分



相手のことが
許せない
と思うことが
ある自分



私のことを
分かってほしい
と思っている自分



素直な気持ちで 向き合おう

人間はときにわがままで、独りよがり。そのことに気付いていれば、きっとだれでも相手と素直に向き合える。

相手の立場に立って

自分とはちがう意見や考え方を認めるのは難しいこと。そんなときは、相手の立場に立って考えてみる。そこから分かることもある。

ちがう意見を 受け止めて

自分と意見がちがうからこそ、その人から学ぶことができる。

貧しい農家に生まれ、早くに両親をなくしたジャン・バルジャンは、姉とその子供たちのために、一切のパンをぬすみ、ろう屋に入れられてしまいました。



十九年におよぶ刑期を終えて、ジャンは、ろう屋を出ました。



ようやく、ある町までやって来ますが、どこの宿にもとめてもらえず、食事もできないで、困り果てます。

ジャンは、ミリエル司教の教会にたどり着くと、訳を話してとめてほしいとたのみました。

ミリエル司教は、ジャンを招き入れると、食事をふるまい、ベッドを用意してくれました。



●ミリエル司教は、なぜジャンに、銀のしよく台まで手わたしたのでしょうか。

ジャンは、その夜、夕食のテーブルに並んでいた銀の食器のことを思い出しました。「あれを売ったら、高く売れるぞ。」
ジャンは、ベッドから起き上がると、銀の食器をぬすみ出し、にげ去ってしまったのでした。



次の日、とらえられたジャンは、兵隊に連れられて司教のところへやってきました。司教は、銀の食器はぬすまれたのではなく、ジャンにあげたものだと言います。そして、
「この銀のしよく台もあげたのに、忘れて行きましただね。」
と言って、ジャンにしよく台を手わたします。
おどろいて立ちすくむジャンに向かって、司教は、
「これは、あなたが正直な人間になるために使いなさい。」
と、そつとささやきました。

この話は、ビクトル・ユーゴー作『ああ無情』の一場面です。
この後のジャンの人生がどうなったのか、続きを読みましょう。



ブランコ乗りとピエロ

今年も、都にサーカスがやってきた。

満員のサーカス小屋に、開幕を告げるファンファーレが鳴りひびいた。大王アレキスを招いての、サーカスの初日。ゲートを走り出る馬の衣装も、一段ときらびやかだった。きれいな曲芸で観客を楽しませた馬たちがゲートの中に消え去ると、サーカスの花形、空中ブランコが始まった。

花形
その分野で人気があり、注目を集めている人や事柄のこと(シ)。

ブランコ乗りたちが空中をまう。二人組、三人組とわざが高まるにつれ、拍手は大きくなった。演技を終えて、高い舞台から手をふるブランコ乗りたちに、観客はおしめない声援を送っていた。そのとき、一人が再びブランコに飛び乗った。

(一体何が始まるのか。)

観客の目は、そのブランコ乗りにくぎ付けになった。

(サムのやつ。あれほど言っておいたのに。)

ゲートの赤いカーテンのすき間から、ピエロは、こみ上げるいかりをこらえながらブランコを見上げていた。

ピエロは、サーカス団の古くからのスターであり、団員たちをまとめるリーダーでもあった。

ブランコ乗りのサムが、ここの団員となったのは、つい半年ほど前のことだった。

他国の大きなサーカス団から招かれたかれは、入団早々からスター気取りで、ピエロの言うことさえ、真面目に聞こうとしなかった。そんなサムの態度に、ピエロはいつも腹を立てていた。

今回のことも、そうだった。

「サム。アレキス様のサーカス見物は、毎年一時間と決まっている。その大切な一時間の中で、今年、出番をもらえたのは、馬の曲芸と空中ブランコ、そして、この私の三つだけなのだ。だから、いつものように一人で目立って、いい気になって、時間を延ばすんじゃないぞ。分かったか。サム。」

「またお説教か。スターが目立って、何が悪いというんだ。ああ、そうか。分かったよ。あんたも大王様の前で目立ちたい、そういうことだろ。」
いつも以上に強い口調でピエロに言い返すのだった。

大歓声の中、サムはブランコを止め、その上でゆっくりと逆立ちを始める。後は、息もつかせぬわざの数々。手を変え品を変えて、観客を楽しませた。サムがブランコの柱を下りたとき、すでに約束の一時間は過ぎようとしていた。大王アレキスの一行は、拍手に送られて予定通りにサーカス小屋を後にした。拍手の音が遠くに聞こえるゲートのおくの通路で、演技を終えてぐったりしているサムと、舞台へ向かうピエロがすれちがった。ピエロは一瞬立ち止まらなかったが、足早にゲートへと走って行った。

ピエロは、いつものような陽気なしぐさで舞台に立った。かれの曲芸はい

つも以上に力が入っているように見えた。

つなわたり。ライオンの火の輪くぐり。アクロバット。サーカスの初日は大盛況で幕を閉じた。しかし、ひかえ室に集まった団員たちの顔に、笑顔はなかった。団員たちは、サムに対するいきりど、ピエロに対する同情で固く口を閉ざしていた。

しばらくして、サムが、机をたたいて立ち上がった。

「なぜ、だまっているんだ！ 言いたいことは分かっているよ。しかし、サーカスは大成功じゃないか。私はこのサーカスのために、夢中になって演技をしたんだ。その私の何が悪いというんだ。」

団員たちは、だれも答えなかった。

(無視されている。)

そう思うと、サムはいつそう腹を立て、いすをけりたおした。

そのとき、部屋の片隅にいたピエロが立って、静かに話し始めた。

「今日、ゲートに向かう通路でサムとすれちがったんだ。演技を終えたばかりのサムを見たのは初めてだった。かたで息をしているサムの顔は、真っ青で、そばにいる私にも気付かないほど、つかれ果てていた。」

(一体、何を言い出すのか。)

サムは、ピエロの横顔をにらんだ。

「そのサムの姿を、私は、今も思い出していたんだ。私も目立ちたかった。最初はサムをブランコから引きずり降りたいたいほどくやしかった。でも、カーテンの隙間から見たサムの演技と、終わった後のつかれ果てた姿を、何度も思い出しているうちに、私の心の中からもなぜかサ

ムをにくむ気持ち、消えてしまったのだ。」

ピエロのおだやかな目が、サムの目を見つめた。ピエロは続けた。

「サムは、カいっぱい頑張っている。だから、観客の心を打つのだということが分かったよ。これから私は、サムを手本に努力していくつもりだ。サムのおかげで、今日はいい演技ができた。でも、サム。このことだけは、君にも分かってほしい。おたがいに、自分だけがスターだという気持ちは、捨てなければならぬと思うんだ。このサーカス団のためにも。」

ピエロの言葉が、うつむいているサムの耳に強く残った。

夜がふけても、団員たちが引き上げていったひかえ室に、サムとピエロの声だけがいつまでも聞こえていた。自分だけがスターだという気持ちを捨てた二人にとって、一緒にいることは、少しもつらくなかった。

いつしか、朝日が二人の顔を照らしていた。

一か月が過ぎ、都でのサーカスも、最終日をむかえた。

ブランコ乗りが空中をまう。その中に加わったピエロが、こっけいなしぐさをして、わざと落下する。観客から大きな笑いと拍手。ブランコ乗りとピエロの共演も、今日が最後だった。

全てを終えたひかえ室は、団員たちの明るい笑い声に包まれていた。そこには、大王アレキスから届けられた料理とシャンペンが、所せましと並べられていた。



大盛況
とても多くの人が集まりさ
かんさま。

(5) 支え合いや助け合いに感謝して

支えてくれる人たちがいる毎日

私たちは、毎日の生活の中で多くの人々に支えられ、いろいろな人のお世話になって生きています。

当たり前になっていることも、それを支えてくれていてくれるだけかがあります。あなたはどのようにして感謝の気持ちを伝えますか。



感謝の言葉「ありがとう」

ありがとう

漢字で書くと……

有難う

「ありがとう」の言葉の元は、「有り難し」です。

これは、「有ることが難しい」、「滅多にならば嬉しいもの」という意味があります。

感謝の心は

最大の美德のみならず

あらゆる美德の両親である

マルクス・トゥッリウス・キケロ

(古代ローマの哲学者)

感謝の心を

忘れてはならない。

感謝の心があって初めて、

物を大切にする気持ちも、

人に対するけんきよさも、

生きる喜びも生まれてくる。

松下幸之助

(実業家)

支えてくれる その思いを感じよう



● いろいろな人の支えと、その思いについて気付いたことを書きましょう。

支えてくれている人 ()

()

支えてくれている人 ()

()

支えてくれる
その思いに
応えよう

支えられていることに感謝し、その思いに
応えるために、どのようなことができるでし
うか。

● 家庭、学校、地域であなたを支えてくれている人の思いに応えるために、どのようなことをしてみたいですか。

だれに

どのようなこと

● 高学年としてできることの例

だれに 運動会の準備を手伝ってくれた地域のみなさん
どのようないふ

「ふるさと交流会」を企画して、地域のみなさん
を招き、感謝の気持ちを伝えたい。

だれに

どのようないふ

黄熱病とのたたかい

ニューヨークから北へ車で四時間。山と湖に囲まれた避暑地の山荘で、静かに物思いにふけっている男がいた。世界的に有名な医学者、野口英世である。

英世は、四十一歳のこの年、病気が重なり、入院するという不運に見まわれた。しばらくこの山荘で、病後の静養をしていたのである。アメリカでの十数年の生活で、こんなにのんびりしたのは初めてだった。

どこことなく故郷の猪苗代に似ている風景をながめていると、幼いときから今までの思い出が、次々とかんでくるのであった。

英世は、仲間から「ねむらない日本人」と呼ばれるほど研究に打ちこみ、世界的に注目される研究成果を次々と発表してきた。そして、世界の一流学者の証明であるロックフェラー医学研究所の正員となった。慣れない外国での生活、仲間との激しい競争、それらを乗りこえて最高の喜びを手にしたのである。

英世がここまで来るには、実に多くの人々の支えがあった。

(くじけそうになる自分をいつもはげましてくれた母。自分の才能を見だし援助してくれた小林栄先生。やけどの左手を手術し医学の道に導いてくれた渡部鼎先生。アメリカにわたるまでの一切の面倒をみてくれた血脇守之助先生。アメリカでの研究生活を親身になって支えてくれているフレクスナー博士。さらに、自分の度重なる借金の申し入れに応じてくれて

いる数多くの友人たち……)

英世は、思い出すたびに目頭が熱くなった。しかし、自分はその人々の期待に十分にこたえているだろうか。今までのことをふり返りながら、いまだに他人の善意にあまえきっている自分を情けなく思うのであった。



野口英世の生家(野口英世記念館)。手に大やけどをしたいろいろがある。

このころ、アメリカでは、黄熱病に関する研究に大きな関心が寄せられていた。黄熱病は、中南米やアフリカなどに発生していた病気で、ある。当時、コレラやペストと並んで、最もおそれられていた感染症の一つであった。

ロックフェラー医学研究所の所長であるフレクスナーは、エクアドルにある黄熱病の研究グループに優秀な学者を推薦してほしいと、たのまれていた。もちろんかれは、英世を推薦しようとした。しかし、十分に健康を回復していない英世に、そのことを言うべきか迷っていた。

「野口君、黄熱病の研究グループの一員に推薦しようと思うのだが、どうだろう。ただ、私としては君の体のことが心配なんだが

野口英世
(一八七六―一九二八)

避暑地

高原など、夏の暑さをしのぐために適(てき)した土地

静養

病氣やつかれを回復させるために心身を休めること

ロックフェラー医学研究所
ロックフェラー大学の前身
石油王ロックフェラーが設立。多くの歴史的大発見がなされ、多数のノーベル賞受賞者を出した。

黄熱病
アフリカ、中南米の熱帯地域(ちいさ)の風土病(か)にさされることで感染する。発病後の特効薬は現在もないが、ワクチン接種により発病を予防できるようになった。



アフリカのガーナに建つ野口英世の銅像(どうぞう)

ね。」

思い切ったたずねてみた。

病み上がりの体で、黄熱病の流行する熱帯地域へ行くのは危険だと仲間たちは心配した。だが、英世は答えた。

「所長、ぜひ行かせてください。私の体はもう大丈夫です。」

新たな研究への情熱と、周りの期待に応えたいという思いでいっぱいだった。

エクアドルに着いた英世は、次々と新しい発見をし、独自のワクチンを作って治療に当たった。こうした英世たちの努力で、中南米をおそった黄熱病のあらしも、どうにか収まった。しかし、英世と黄熱病とのたたかいは、その後も休むことなく続けられた。

英世が黄熱病の研究に取り組んで十年がたったころ、西アフリカで再び黄熱病が流行し、多くの命がうばわれた。英世はじっとしていられず、アフリカに行くことをフレキシナー所長に申し出た。

「所長、今度こそ、病原体をつきとめる最後のたたかいです。」

「野口君、その体では無理だ。君はここで研究したまえ。」

英世のおとろえた体を気づかったフレキシナー所長は、英世のアフリカ行きに強く反対した。だが、英世はせかされるようにアフリカへと向かった。

アフリカにわたった英世は、つかれた体にむち打ち、研究に打ちこんだ。しかし、とうとう英世自身が黄熱病にかかり、たおれてしまったのである。

高い熱にうなされながら、英世はなつかしい母の夢を見た。

「お母さん、私は好きな研究を続けることができ満足です。このようにできたのも、みなさんのおかげです。」

「英世や。お前は自分の仕事に一生懸命頑張ってきたんだ。その気持ちはきつとみなさんにも伝わっているよ。」

英世は、多くの人々のいのりもむなく、静かに息を引き取った。英世の死は、新聞などによってすぐに世界の国々に広がり、世界中の人々が英世の死をおしんだ。

ニューヨーク市ブロンクス区にあるウッドローン墓地には、「科学へのこうけんを通して、人類のために生き、人類のために死す」と刻まれた墓碑が建てられており、かれの業績を後世に伝えている。